

箏笥(たんす)

2004(平成16)年7月29日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★



監督=キム・ジウン/出演=イム・スジョン/ムン・グニョン/ヨム・ジョンア/キム・ガブス(コムストック配給/2003年韓国映画/115分)

……箏笥(たんす)をキーワードとし、美しい姉妹と若い継母との対立を中心に描いたミステリーホラー。ナゾと恐怖の積み上げの必要性はわかるが、あっと驚く効果音の使い方は、ちょっとオーバー気味……? やっぱり、ホラーはもういいや……。

もともとホラー映画は嫌い!

私はもともとホラー映画が嫌い。特に、恐いだけのヤツは大嫌い。しかし、この映画は『シックス・センス』(99年)と同じようなミステリーホラーであるうえ、予告編で、登場人物が「美しい姉妹」であるとわかっていたため、まあ、映画評論家の義務として(?) 観ておこうと思ったもの。また、最近はやりの「韓流」の1つの傾向としても観ておかなければと……。

その結果は、当初の予想どおり、映画自体は宣伝されているほどの内容とは思えなかったが……。映像の美しさとうまくつくられたミステリー的なストーリー構成には納得……。

効果音の使い方は抑制的に!

ミステリーホラー映画特有のテーマとして、効果音の使い方がある。観客席の思わぬところから音を出したり、観客の目をずっとスクリーンに集中させたうえで、いきなり大音響を出して驚かせたり、とその手法はさまざま。しかし、その驚かし方の限界がどこまでかは難しい。あまりこれを狙いすぎると、かえってつくりモノ風になってしまい、しらけてしまうことになるから。

その観点からいうと、この映画での効果音はちょっと使いすぎ。ストーリーの進行上、映画は静かな場面が多い。2人の姉妹が家に入ってくる時も無言のまま。また、家族4人がそろって(?)食事している時も、ほとんど会話なし。したがって、そういう場面で、きまって1人トーンの高い声でけたたましくしゃべりまくる継母の姿やセリフは、1人だけ突出したものとなって印象的。そして、ホラーシーンになると、必ず静かな場面が流れ、ギリギリまで観客の目をそこに集中させたうえ、突然大仰な効果音が……。1度だけならいいが、それがくり返されるとどうも……。

映像の美しさとストーリー構成は納得

他方、この映画の映像の美しさはオーケー。部屋の中は概ね暗いイメージだが、美しい姉妹が着ている白い服や、いつもオシャレしている継母のシンプルな衣裳はすごくきれい。だから、そこに真っ赤な血の色が入り込むと、より効果的で美しいコントラストとなっている。

また、次々とスクリーンに登場するいかにも意味ありげなシーンは、いつ、どこで、どうタネ明かしになるのだろうという興味をひきつけるに十分。時計のナゾ、日記帳のナゾ、筆筒の中に収められている同じ服のナゾ、その他……。ラストに向かうにつれて、観客の目を筆筒にひきつけていきながら、次第にこれらのナゾが明かされていくストーリー構成は立派なモノ。

原作は『薔花紅蓮伝』だが……

この映画の原作は、韓国に伝わる有名な古典『薔花紅蓮伝』。これは継母が実の息子を連れて2人の姉妹のもとに来ると、殺された姉妹が亡霊となって継母と息子の悪行を政治家に訴えるという勧善懲悪の物語、とのこと。

もっとも、この原作どおりに映画をつくっているわけではなく、この原作から、2人の姉妹と継母との対立というテーマだけをパクリ(?)、1つのミステリードラマをつくりあげている。『シックス・センス』のミソは、「実はマルコム(ブルース・ウィリス)は死亡していた!」ということだったが、さて、この映画のミステリーのミソは何だろう……?

タイトルの意味は？ 観客は？

この映画の邦題の『筆筍（たんす）』は、それだけでは何のことかサッパリわからない。しかし、逆にその『筆筍（たんす）』というタイトルの中に、ミステリーの本質が隠されているということもわかる。

したがって、観客に対して、「そのタネ明かしを楽しもうよ！」とエールを送ることを狙った邦題だ。これに応じて、タネ明かしにチャレンジしにきている観客の多くは、若い女性グループ。そのため、ホラーシーンがひと山越える毎に、あちこちでざわめきと短いおしゃべりが……。それはそれでかわいいもの……。そして、なるほどこんな観客がホラー映画を観に来ているのだということにも納得。

鑑賞余話、お前ら、おバンか！

ところが、納得できず腹がたってきたのが、近くの席に座ってきたマナーの悪い若い男子の2人連れ。指定席として受けとっていた真ん中の席は、両隣や前の席が詰まっていたので、例によって(?) 1人離れて、空いていた1番後ろの端の席で観ていたのが私。その席から4席ほど離れた席に、彼らは映画が始まってから陣取ってきた。

私も、席がタツプリと空いているので、前のシートに長い足(?) を投げ出して観ているというお行儀の悪さだったが、その若い男連れは、ハダシのまま足を投げ出すわ、映画の途中でお菓子をボリボリ食うわ、途中で「わからへん、あれなんや！」とおしゃべりするわ、まるでオバサンの2人連れ(失礼!) と全く同じ状況。「お前ら、おしゃべりする前にパンフレットでも読んで勉強しろ」「2人だけの世界でおしゃべりするな!」「ボリボリ音をたててお菓子を食うな!」と怒鳴ってやりたかったが、さすがにそこまでする勇氣は……?

2004(平成16)年7月29日記